

キーワード

アウトリーチ

Outreach, リハビリテーション専門家が直接地域活動に出向く訪問型サービス。地域で活動するため, CBR と間違われることが多いが, 基本的に医療モデルの IBR の延長線上にあるサービス。

(障害の) 医療モデル

障害を人間の平均的な値からの逸脱ととらえ, 平均的な値が正常という立場からこれを治療する対象と考えるモデル。

エンパワメント

Empowerment, 原義は力を与えることだが, 障害者が元々持っている能力を社会的抑圧等を取り除いて開花させることの意味で用いられる。

開発援助

「開発」の概念の変遷と共に変わってきているが, 開発途上国・地域の発展を支援すること。当然, そこに存在する人たちは限定的にとらえられてはならず, 障害者も含んだ発展 (Disability Inclusive Development) が考えなければならない。

ケイパビリティ・アプローチ

Capability Approach。イギリスの経済学者, A.センが提唱している「～であること」や「～できること」という様々な「機能(functionings)」の達成可能性を表す「ケイパビリティ(capabilities)」の幅によって人々の良い生(well-being)や生活の質を直接捉えようとする視点・思考の枠組み

言語集団

同じ言語を話す集団。手話の問題を考える際には、民族などよりも広いこうした概念を導入して考える必要がある。

権利

通常は、各個人が持つ基本的な権利のことをさすが、中国のように国家によって与えられるものであるという理解のされ方がされている国もある。しかしそうした国も含めて、この権利を守るのは国家の責務とされるということでは、国際的なコンセンサスができつつあり、これまでそうした権利を実現する機会を十分に持てないでいた障害者についても、非障害者と同じ権利を有し、それを行使する権利を保護する主体としての国家の役割、国際社会の役割が注目されている。

障害者の権利条約

国連で 2001 年のメキシコによる提案、国連総会決議（56/168）を受けて交渉が開始され、特別委員会で現在議論がされている障害分野の人権条約。障害を貧困と社会的排除という開発の文脈においている。1993 年の障害者の機会均等化に関する基準規則が条約と違い、拘束力・強制力がなかった反省の上に立つもの。

国際協力

国連の条約交渉の場では、各国間の協力を意味し、国家的な取り組みの支援や条約の目的達成のための加盟国間の援助を意味する。このため、開発援助の別名であるとして欧州連合(EU)が障害者の権利条約の交渉で、この条文化に抵抗している。

自立生活運動（IL 運動）

障害者が施設の中や、親の庇護・監督の下ではなく、障害者自身の自己決

定と自己管理の下に町の中で生活すること。医療モデル的な誰からも支援を得ないで生活するという意味ではない。

社会開発

経済開発ではとらえきれない社会的な側面から開発途上国の発展をとらえるアプローチ。経済開発より、より広いアプローチと言える。経済開発の中で取り残された社会の部分、経済開発で十分に対応できなかった社会の部分にも注目して、社会全体としての開発を考える仕方である。

社会のバリアフリー化

障害者に利用しやすい公共施設や交通、情報通信などを整備すること。障害者の資源利用可能性（エイタイトルメント）を高める制度的基盤や条件の指標化がその指標として求められている。

（障害の）社会モデル

障害の医療モデルとは異なり、社会集団や周囲の社会環境を考慮する社会的アプローチ。このため、障害についても、個人の問題ではなく、社会と個人の間の関係にこそ障害があるとして、社会の側での変革を求めるアプローチ。

集団モデル

当事者どうしの結びつきを重視し、その集団にとっての良好な環境を求めようとするモデル。個人が直接社会に対峙するという形ではなく、集団モデルは個人が帰属する集団にとっての良好な社会的環境を考えようとする考え方。

手話

歴史的に聞こえない人々の集まりの中で形成された自然言語であり、ろう

者固有の歴史と文化をつくりだす母体となっている。聞こえない子どもたちの識字教育を進める上でもっとも有用な教育手段。このような手話の伝承は聞こえない人々の集まりにおいてしか達成できない。

障害

古くは、機能不全や社会生活上の不便・逸脱のことを指していたが、1980年 WHO が、Impairment（機能・形態障害）、Disability（能力障害）、Handicap（社会的不利）という三つの障害概念の整理・普及を行った。その後、障害の社会モデルの出現により、個人的な Impairment と社会的に作られた Disability の二つの障害が言われるようになった。

障害学

欧米で発達した障害当事者の視点に基づく社会科学。特にイギリスで発達した障害学は、障害の「社会モデル」を強く打ち出し、国連等での障害者関係施策に大きな影響を与えている。

障害者団体

障害を持つ本人あるいは障害によっては、その家族の人たちからなる団体も含む。障害当事者団体とも呼ばれる。

障害調整生存年数(DALYs)

Disability-Adjusted Life Years。世界銀行の『世界開発報告 1993』(World Development Report 1993, World Bank 1993)等で参照された健康指標で、生命の質を調整した余命データを使った社会指標。

人権

国連では子供、女性の問題等が慈善アプローチではなく、人権アプローチの下で取り組まれるようになってきている。障害者についても同じような方

向が目指されており、障害者もまた非障害者と同じ権利を持つ人間として、開発の様々な分野に貢献できるようにするべきであるという考え方がその基盤にある。

西・中部アフリカ

ナイジェリアを中心にその周辺に広がるベナン、カメルーン、ガーナなどの国々。アフリカでろう者によるろう教育が行われ、1957 年以降、30 年間で 13 ヶ国に 31 校のろう学校が開設された地域。

人間開発指数

国連開発計画の『人間開発報告書』で用いられる発展の評価指数。個人の特性や能力と実際の生活の質を媒介する社会的文脈を十分に考慮することのない「生活の質」指標について、障害と生活能力の間にあるメカニズム（あるいは社会的排除のメカニズム）を明らかにしない危険性を持っている。

非障害者

本書では、通常の「健常者」という言い方ではなく、非障害者という言い方を用いる。これは、障害学の伝統に則った言い方であるが、非障害者と障害者の間に、「健康」あるいは「健常」と言ったようなバイアスを持つ区別を無意識に持ち込むことが、社会の障壁のひとつであると考えているからである。

貧困削減

1990 年代の国連の国際開発目標をまとめ上げた国連ミレニアム開発目標(MDGs)は、2015 年までに 1 日 1 ドル未満で生活する人口比率を半減させるというターゲットを掲げている。これにより貧困削減が、国際社会で共通して目指す目的となった。

複線アプローチ

ツイン・トラック・アプローチ (Twin Track Approach)。開発援助における「障害のメインストリーミング」と「障害者のエンパワメント」を開発援助という一つの枠組みの中で平行して推し進めること目指すアプローチ。

法律扶助

「法の前での平等」を実現し、市民の人権保障、特に社会的弱者の司法へのアクセスを保障するために行う扶助。司法へのアクセスとして有効な手段の一つであるが、障害者の権利実現に結びついているのかどうかは各国の事例に基づいて分析されなければならない。

ろう者によるろう教育

①運営者と教職員の多くがろう者、②ろう学校で手話を使っていた、③成人のろう者に対する教育にも力を入れていた、④アフリカ人ろう者たちが、事業全体の中核を担うスタッフにという形で実践されたという特徴を持つ西・中部アフリカにおけるろう教育がこの形であった。

CBR

Community-Based Rehabilitation, 地域に根ざしたリハビリテーション。「障害を持つ全ての人々のリハビリテーション、機会均等、ソーシャル・インクルージョン（社会的統合）のための総合的な地域開発の中の一つの戦略」(ILO・UNESCO・WHO, CBR ジョイントポジション・ペーパー2004)。

IBR

Institute-Based Rehabilitation, 従来から実践されている中央集権型アプローチの手法。障害者自身が施設まで出向いてサービスを受けるという形態をとる医療モデルでのトップダウンのアプローチ。